

主催 邦楽連会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二
新橋演舞場別館
電話 (五四一) 五四七二番

清元協会

港区南青山二の十七の十二の二
電話 (四〇二) 〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三新橋会館
電話 (五七一) 〇二一六番

常磐津協会

港区南麻布五の三の四十六
電話 (四四四) 三〇二〇番

長唄協会

中央区銀座八の十一の九
電話 (五七二) 四九四五番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話 (五八五) 九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和五十一年二月八日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演
第二部 四時半開演 八時終演

'76 都民芸術フェスティバル

第六回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

「邦楽演奏会」に寄せて

東京都知事 美濃部 亮 吉



のあたりまえのねがいが、いまほど実現しにくい時代はないことも事実です。

その障害の壁を越えて、このねがいの実現に挑戦してゆく都民にとって、何よりも必要なのは心の糧であり、活力です。

「すぐれた芸術を、やすい料金で」という東京都のねがいに共鳴して、ことしも多くの芸術家や芸術文化団体が、そのねがいを実現してくれました。

私は、この助成公演の提供するゆたかな芸術が、都民のみなさんにとって、いこいと励ましの源泉となることをねがいます。また、その公演の一つであるこの「邦楽演奏会」が、そのための大きな一役を演ずることを期待しています。

第一部番組（十二時半開演）

一、三曲 光崎檢校 作曲 桜

川

三絃	田中	雅樂代	箏高音	中島	雅樂之都
関野	雅樂美		赤嶺	雅仁志	
桂田	雅樂惠		我妻	雅樂柳	
三宅	雅樂倫				
酒井	雅師	箏低音	中島	靖子	
平田	雅豊世		石井	雅樂盈	
椿田	雅樂菊		富田	雅樂楓	
黒河内	雅志賀		山下	雅樂葉	
大久保	雅礼		川島	雅樂慧	
			徳本	雅樂亮	
			角井	雅樂伎	

二、宮 蘭 桂 川 恋 の 柵 (桂 川)

浄瑠璃	宮	蘭	千芳	三味線	宮	蘭	千愛
同	宮	蘭	千佳	同	宮	蘭	千萬
同	宮	蘭	千祐三	同	宮	蘭	千咲

三、義太夫 仮名手本忠臣蔵 祇園一力茶屋の段 (七段目)

由良之助	竹本	重之助	三味線	鶴澤	三生
お軽	竹本	駒之助			
平右衛門	竹本	駒龍			

四、清 元 幾 菊 蝶 初 音 道 行 (忠信または吉野山)

浄瑠璃	清元	梅波太夫	三味線	清元	益壽郎
同	清元	登志男太夫	同	清元	高三郎
同	清元	波栄太夫	上調子	清元	吉三郎
同	清元	梅喜太夫			

五、常磐津 伝兵衛 堀川の段

浄瑠璃 常磐津 文字太夫
 同 常磐津 須磨太夫
 同 常磐津 小文太夫
 同 常磐津 八重太夫
 三味線 常磐津 文字兵衛
 同 常磐津 文字蔵
 上調子 常磐津 文奈

六、三曲 中能島松声 作曲 雨 夜の月

箏 上原 真佐喜
 大塚 真佐恵
 大貫 貴佐王
 箱田 佐喜英
 福田 真津乃
 三絃 田中 佐喜秀

七、長唄 勧進帳

唄 杵屋 吉十郎
 同 杵屋 佐弥吉
 同 松永 鉄庄治
 同 杵屋 寿介
 同 杵屋 佐夫吉
 同 杵屋 佐武郎
 三味線 杵屋 佐之吉
 同 杵屋 佐之克
 同 杵屋 小佐吉
 同 杵屋 佐喜
 上調子 杵屋 佐武郎

笛 鳳声 晴雄
 小鼓 望月 太喜右衛門
 同 梅屋 右近
 同 望月 健志
 大鞆 望月 左吉

歌詞と解説 (演奏順)

第一部

一、三曲櫻さくら川がわ

桜川といえは、同名の謡曲「桜川」があり、狂女ものとして知られている。この曲はそれから取材して、その一節をとって、紀貫之の古歌を謡ってある。

曲の構成は三段形式で、前唄があつて長い手事(間奏)から、後唄でも花の美しさをたたえ、水のきれいな桜川をほめてある。曲の出が低二上りで、一下りを通つて本調子になるという調子の変化があり、曲の進むにつれて高調してくる。京都の名作者光崎校作の三絃曲に箏の手がつき、歌は短いが手事の長い曲。

なお、桜川というのは、むかし桜の名所として知られた川のことで、茨城県の北那珂村から新治村を通つて霞ヶ浦へ入る川のこと。桜の銘木が多く、しかも品格の高いこと日本一といわれた。流程約十三里。筑波川ともいう。

へ新玉の、春は水もとけ初めて、浪の花こそよすらめと、せせの白波しげければ、霞をながす浮島の、(手事)へげにや面白や、昔の春も今もなお、変らで花の麗しき、水もにこらぬ桜川。

二、宮園桂川恋こいの柵しがらみ

宮園節は、もと上方に生れ、幕末ごろから江戸に定着した浄瑠璃である。江戸では、むしろ、園八節といういい方で知られていた。独特な三味線の音色と、哀切な語り口は、永井荷風の小説「雨瀟々」にも描かれている。

この曲は、数少ない宮園節中でも、代表作にあげられるもので、比較的長く、まとまったものである。

お半長右衛門の実説は不明だが、凡そ享保(一七一六―一七五)の頃、京都の桂川に、若い娘と四十男の死骸が流れつき、密通の上の心中とも、強盗に殺されたものだともいわれて評判になった。これが歌舞伎にとり上げられ、ついで明和(一七六四―一七八)の初めごろ宮園に作曲されたもの。義太夫節をはじめ、他の邦楽に見えるお半長右衛門の道行は、すべてこの曲がもとになっている。題材からいっても、ふつうの心中道行が遊女と客の悲恋ものなのに、信濃屋のお半は町家の娘で十四歳、帯屋の長右衛門は三十八歳の分別盛り。年齢も境遇も隔たつているという点も、この心中道行の評判を高くした理由であろう。

信濃屋の娘お半は、乳母や丁稚の長吉と伊勢参りの帰り途、隣家の帯屋長右衛門と一緒にいる。その夜、石部の宿で丁稚の長吉にいい寄られたお半は、長右衛門の部屋に逃げて同衾し、思はず契りを結んでしまう。長右衛門の妻お絹は、お半を自分の弟と縁組させようとする。お半の懐胎を知った長右衛門は、お半を背に桂川へ急ぐ。

二上りへ白玉か、何ぞと人の咎めなば、露と答えて消えなまし。ものを思えば恋衣、それは昔の芥川。本調子へそれはむかしの芥川、へこれは桂の川水に、浮名を流すうたかたに、泡と消えゆく信濃屋の、お半を背に長右衛門、逢う瀬そぐわぬ仇枕、結ぶ帯屋の軒もはや、今宵限りの月影に、流れて連れて行く身にも、妻にも名残り押小路、哀れはあとに遠ざかる、町を離れてようようと、背をおろしてとりどりに、姿つくろう

心根は、まだ娘気のとやさき。連れて行く身は常よりも、心細道夫の声、あれ壬生寺の鐘の数、九つここに北南、東寺の塔や朱雀野の、火かけかすかに三筋町、身にしむ風に誘われて、へこれおはん、こは三条愛宕道、露の命の置き所、(中略)四十に近い身をもつて、十四やそこの小娘と、一緒に死んでは義理知らずと、へ世間の人の笑い種、親御の恨み、おきぬが思惑、とにかくそなたは永らえて、亡き我があとを弔うても、頼むとばかりいい残す、袖は涙のにわたずみ。へおはん涙の露塵ほども、お前の無理じやあるまいけれど、私やいやいな。そんなその様な胸愁な、年もゆかいで恥かしい、これこの帯はどうしようえ。殿御を先へながらえて、身二つになり大胆な、いたずら者じゃ、悪性な、不心中なと人さんが、笑わんしても大事ないかそりや可愛いじゃない、憎いのじゃ。小さい時からお前をまわし、祇園参りや北野さん、物見見物あと追うて、手を引かれたり、負われたり、はだか人形無理いうて、買うて貰うたかんざしも、(中略)定まり事とあきらめて、一緒に死んで下さんせ。父さんや母さんの、憎い中にも死んだなら、貞女とやらじゃ、でかしたと、また賞めらるる事もあろう、ええなあもしと頑是なく、恋をたてぬく輪廻の絆、抱きつくづく顔と顔、男もこう涙の湖、共に沈まんこなたへと、手に手を鶏の声告げて、もはや桂に月の声、あれうしろに火の光、見咎められぬそのうちに、いざや最後と諸共に、石を袂に糸と針、繻子の帯屋と信濃屋の、娘々と呼ぶ声に、見付けられじと足早に、こけつまるろびつ牛ヶ瀬の、水上へこそ急ぎ行く。

今日演奏される「一力茶屋」は、その七段目にあたる。俗に「茶屋場」といわれ、にぎやかなうちにも切迫感と哀愁とをたたえている。歌舞伎でいうと、由良之助役者にとつて野心的な場面である。

前半の「蝟香」は省略。祇園の一力茶屋で由良之助が、顔世御前から来た密書を開いて読んでいるのを、離れの中二階から、お軽に読みとられてしまう。由良之助はお軽を連れ出して殺そうとし、身請けすることとなる。そこへお軽の兄で足軽の寺岡平右衛門がやってきてお軽に会い、由良之助の近況をきき、また、父の与市兵衛の横死したこと、お軽の夫勘平が腹を切つて死んだことを語る。そしてお軽を殺してそれを功に連判の列に加わろうとする。その忠誠を知った由良之助は、二人を許し、平右衛門を一味に加えることにするところまで。(九太夫を刺す件は省略)

へ小身者の悲しさは」とか、へ勘平殿は三十になるやならずに」などは知られたことば。また、前半にあるへ舟玉様か……」のあたりは、忠臣蔵には珍らしいエロチックなせりふである。

三、義太夫 祇園一力茶屋の段

仮名手本忠臣蔵 おんいちりきぢや だん

「忠臣蔵」については、とくに記すこともないだろう。日本の代表的な舞台作品で、上演回数もとても多く、誰にも親しまれている。

元来が義太夫節で、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作作品。寛延元年(一七四八)八月、大阪竹本座で初演された。

へ折に二階へ勘平が、妻のおかるは酔いざまし、はや里なれて吹く風にうさをはらしている所へ、ちよと行てくる、由良之助ともあろう侍が、大事の刀を忘れておいた、つい取ってくるその間に、掛物もかけ直し、炉の炭もついでおきや。ああそれそれ、こちらの三味線踏み折るまいぞ。これはしたり、九太は往なれたそうな、へ父よ母よと泣く声聞けば、妻に鸚鵡のうつけし言の葉、ええ何じやいな、おかしやんせ。あたり見廻し由良之助、釣燈籠の灯を照らし、読む長文は御台より、敵の様子こまごまと、女の文のあとや先、参らせ候ではかどらず、よその恋よと羨ましく、おかるは上より見おろせど、夜目遠目なり字性もおぼろ、思いついたる延べ鏡、出して写して読み取る文章、下家よりは九太夫が、繰り下す文月影に、すかし読むとは神ならず、ほどけかかりしおかるがかんざし、ばったり落つれば、下にはハッと見上げて後へ隠す文、緑の下にはなのおえつば、上には鏡の影かくし、由良さんか。おかるか、そもじはそこに何してぞ。わたしやお前に盛りつぶされ、あんまり辛さに酔いざ

まし、風に吹かれているわいな。ムウハテのう、よう風に吹かれてじやの、いや、かる、ちと咄したい事がある。屋根こしの天の川で、ここからはいわれぬ、ちよつと下りて給もらぬか。咄したいとは頼みたい事かえ。まあそんなもの。まわつて来やんしよ。いやいや段梯子へ下りたらば、仲居がみつけて酒にしよう。ああどうしような。あこれこれ、幸いここに九つ梯子、これを踏まえて下りて給もと、小屋根にかければ、この梯子は勝手が違つて、おお怖、どうやらこれは危いもの。大事な事だじやない、危いこわいは昔の事、三間づつまたげても、あかこうやくも入らぬ年ばい。阿呆いわんすな、舟に乗つたようでこわいわいな。道理で舟玉様が見える。おおのぞかんすないな。洞庭の秋の月さまを拝み奉るじや。いやもうそんな下りやせぬぞ。下りざおろしてやる。あれまた悪い事を。やかましい、生娘かなんぞのように、逆縁ながらとうしろより、じつと抱き締め抱き下ろし、なんとそもじは御覧じたか。あ、いいえ。見たであろみたである。あいなんじややら、面白そうな文。あの上から皆読んだか。おおくど。身の上の大事とこそはなりにけり。何の事じやぞいな。何の事とはおかる、古いが惚れた、女房になつて給もらぬか。おかんせ嘘じや。さ嘘から出たまことでなければ根が逃げぬ、おうといや。いやいやいまい。なぜ。お前のは嘘から出たまことじやない。まことから出た嘘じや。おかる請出そう。ええ。うそでない証拠に、今宵の内に身請けしよう。ムいやわしには。間夫があるなら添わしてやる。そりやまあ本かえ。侍冥利、三日なりとも聞うたら、それから勝手次第。はあ嬉しうござんすと、いわしておいて笑おうで。いやすぐに亭主に金渡し、今の間に埒さそう、気遣いせず待てい。いやなら必ず待っているぞえ。金渡しして来る間、どつちへも行きやるな、女房じやぞ。それもたつた三日。それ合点。忝けのうござんす。へ世にも因果な者ならわしが身じや、可愛い男にいくせの思い、ええ何じやいなおかしやんせ、忍び音に鳴く小夜千鳥、奥で諺うも身の上と、おかるは思案とりどりの、折に出逢う平右衛門、妹でないか。やあ兄さんか、恥かしい所で逢いましたと顔を隠せば、苦しゅうない、閑東より戻りがけ、母人に逢うてくわしく聞いた、夫のためお主のため、よく売られた出かしたでかした。そう思うて下さんすりやわしや嬉しい、したがまあ喜んで下さんせ、思いがけのう、今宵請出さるはず。それは重畳、何人のお世話で。お前も御存知の大星由良之助様のお世話で。何じや由良之助殿に請出される、それは下地から馴染みか。何のいな、この中より

たそのあとで、首なりと死骸なりと、功に立つなら功にさんせ、さらばでござる兄さんと、いいつつ刀取り上ぐる。やれましてはと、止むる人は由良之助、はつと驚く平右衛門、おかるは放して殺してと、あせるを押さえて、ほう兄妹とも見上げた疑いはれた、兄は東の供を許す、妹はながらえて未来への追善、それ平右衛門、食い酔うたその客に、加茂川で水雑炊をくらわせい。はあ、往け、や、してこいな。

四、清元 幾菊蝶初音道行(吉野山)

義太夫の「義経千本桜」の四段目、「道行初音旅」を、清元に作りかえたもの。(第二部の二番目の解説を参照された)

義太夫狂言を歌舞伎へ移して上演するときには、あまりに義太夫が重複するので、江戸ではその道行の場面を、必ず豊後系浄瑠璃(常磐津・富本・清元)に改作し、江戸式の舞踊にするのが例となつてゐた。今日の中では、第二部で演奏される「梅川」も、その例としてあげられる。

したがって「義経千本桜」でも、忠信の道行が十数種の舞踊になつたが、今残っているのはわずかである。そのうちでも、今日演奏される清元のこの曲は、もと富本にできていたのをさらに改作したもので、のびやかな明るさの中に、勇壮さと悲哀さの入りまじつた名曲で、振るもよくつけられており、流行している。

文化五年(一八〇八)五月、江戸中村座初演。二世瀬川如卓作詞、鳥羽屋里朝作曲。

へ恋と忠義はいづれが重い、かけて思ひはかりなや。静かに忍ぶ都をば、あとに見捨てて旅立ちて、大和路さして行く野辺も、へ谷の鶯初音の鼓、へ調べあやなす音につれて、つれて招くさ音につれて、へおくればせなる忠信が、吾妻からげの旅姿。へ背に風呂敷しかとせたらおうて、野道畦道ゆらりゆらり、軽いとりなりいそいと、目立たぬように道へ

二三度酒の相手、夫があらは添わしてやる、隙が欲しくばひまやろと、結構すぎた身請。さてはその方を、早野勘平が女房と。いえ知らずじやぞえ、親夫の恥なれば、明かして何のいませう。ムすりや本心放埒者、お主の怨を報する所存はないに極まったな。いえいえこれ兄さん、あるぞえあるぞえ、高うはいわれぬ、これこうこうとささやけば、すりやその文をたしかに見たな。残らず読んだそのあとで、互いに見合わす顔と顔、それからじやらつき出して、つい身請けの相談。あその文残らず読んだあとで、あいな。それできこえた、妹とても逃れぬ命、身共にくれよと抜打に、はつしと切れば、ちやつと飛び退き、これ兄さん、私にはなにあやまり、勘平という夫もあり、きつと二親あるからは、こなさんのままにもなるまい、請け出されて親夫に、逢うと思うがわしや楽しみ、どんな事でも謝まろう、ゆるして下んせ許してと、手を合わすれば平右衛門、抜き身を捨ててどうと伏し、悲歎の涙にくれけるが、可愛いや妹なんにも知らぬな、親与市兵衛殿は、六月二十九日の夜、人に切られてお果てなされた。やあそれはまあ、こりやまだびつくりすな、請け出され添おうと思ふ勘平も、腹切つて死んだわやい。やあやあそれはまあ本かいの、これのうのうと取りついて、わつとはかりに泣き沈むお道理道理、様子咄せば長い事、おいたわしいは母者人、いい出しては泣き思い出しては泣き、娘かるに聞かしたら、泣き死にするであら、必ずいうてくれなとのお頼み、いまいと思へども、とても逃れぬそちが命、そのわけは、忠義一途にこり固まつた由良之助殿、勘平が女房と知らねば、請け出す義理もなし、もとより色にはおふけらず、見られた状が一大事、請け出し差し殺す、思案の底とたしかに見えた、よしそのうても壁に耳、他より洩れてもその方が科、密書を覗き見たるが誤り、殺さなきゃならぬ、人手にかけよよりわが手にかけ、大事を知つた女、妹とて許されずと、それを功に連判の数に入つてお供にたたん、小身者の悲しさは、人にすぐれた心底を、見せねば数には入れられぬ、ききわけて命をくれ、死んでくれ妹と、事をわけたる兄の言葉、おかるは始終せき上げ、便りのないは身の代を、役に立てての旅立ちか、暇乞いにも見えなものと、恨んではばかりおりました、もつたないが父さんは、非業の死でもお年の上、勘平殿は三十になるやならず死ぬるのは、さぞ悲しかり口惜しかり、逢いたかつたであらうのに、なせ逢わせては下さんせぬ、親夫の精進さえ、知らぬは私が身の因果、何の生きておりましよう、お手にかからば母さんが、お前をお恨みなされましょ、自害し

静 へお忠信殿、待ちかねましたわいな。

忠信 へこれはこれは静様、女性の足とあなどって思わぬ進歩、まっぴら御免下さるべし。

静 へここは名に負う吉野山、四方の景色もいろいろに、

忠信 へ春立つと、いづばかりにや三吉野の、

静 へ山もかすみで、

忠信 へ今朝は見ゆらん。

へ見渡せば、四方の梢もほころびて、へ梅ヶ枝うたう歌姫の、へ里の男

子が声々に、わがつまの、へ天井ぬけてすえる膳、柱の枕はつがもなや

へおかし鳥の一節に、へ弥生は雛の妹背中、へ女雛男雛と並べておいて

眺めにあかぬ三日月の、へ宵に寝よとはきぬぎぬに、せかれまいとの恋

の欲、桜は酒が過ぎたやら、へ桃にひそりて後ろ向き、うらやましゅう

はないかいな。

忠信 へせめては憂さを幸い。

へ姓名添えて賜わりし、御着長を取り出だし、君と敬い奉る。へ静は鼓

を御顔とよそえて上に沖の石、へ人こそ知らね西国へ、御下向の御海上

波風荒く御船を、住吉浦に吹き上げられ、それより吉野にましますよ、

やがてぞ参り候わんと、互いに形見を取り納め、へげにこの鎧を賜わつしも、兄継信が忠勤なり。

静 へなに継信が忠勤とや。

へまことにそれよ越し方を、へ思いぞ出する壇の浦の、

能登守教経と、名乗りもあえずよつびいて、放つ矢先は恨めしや、兄継信が胸板に、たまりもあえず真逆様、あえなき最後は武士の、忠臣義士の名を残す。思い出するも涙にて、袖にかわかぬ筒井筒、いつか御身ものびやかに、春の柳生のいとながく、枝を連ぬる御契り、などは朽ちしかるべきと、互いにいさめいさめられ、急ぐとすればかどらぬ、芦原峠鴻の里、雲と見紛う三吉野の、麓の里にぞ着きにける。

五、常磐津 伝兵衛 堀川の段

お俊伝兵衛の実説は、元禄十五年（一七〇二）のことと伝える。その後、祭文や語りもので伝えられていたが、義太夫「近頃河原達引」、これを脚色した歌舞伎の「猿曳門出風」などで、よく知られていた。

幕末も天保（一八三〇―四三）の終りごろ、四世常磐津文字太夫と二世佐々木市蔵が、義太夫を常磐津化するのに熱心だったが、これもその一つ。井筒屋伝兵衛と祇園のお俊は相愛の仲である。そのお俊に横瀬官左衛門が横恋慕して、さまざまな妨害をする。結局、伝兵衛は官左衛門を斬り、追われる身となる。一方、お俊は堀川の貧しい生家に預けられ、盲目の母と猿廻しの兄与次郎と三人で暮らしている。そこへ伝兵衛が訪ねてくるところから、この場面になる。

お俊と伝兵衛をあわせまいとするおかしみ、逢ったあとのお俊の貞節ぶり、与次郎が猿をまわしての祝言など、人物も場面も変化に富み、喜ばれる演目となっている。なお、このあと二人は心中しようと聖護院の森へ急ぐが、官左衛門の悪事があらわれ、二人はめでたく結ばれるというのが、全体の筋となっている。曲中へそりやきこえませぬ伝兵衛様は、あまりにも有名である。

与次郎「こりややい、そのようにしおしおして見せて、おいらをだましてお俊を突こうとするのか、ええその手はくわぬ、

へと、懐より一通をとりに出し、こわごわながらそばに寄り、与次郎「こりや伝兵衛、お俊とわれと手が切れぬと、科人のわれじやよって、妹まで難儀する、それでさつきに妹に得心さして、退状を書かしてある、これこれ、これを見い。これじやよって、もうもうお俊が方に残心気は離れてあるわい。

伝兵衛「ふむ、すりやお俊が退状を、与次郎「こりや退状じや、

伝兵衛「ええその心とは知らず、いい交した言葉をまことと申うて迷うて来たが、無念なわい。へ口惜しいと歯をくいしばる男泣き、へ恨みをきくも隔つる戸口、心はそうじや泣いじやくり、

お俊「おおさぞ腹が立とう、道理じや道理じや、がまあとつくりと氣を鎮めて退状を見て下さんせ。与次郎「おおそれでいい、長う物いよんな、屑が出るぞ屑が。これ伝兵衛、おれが読んで聞かしようても、皆目おれは祐筆じや、さ早う、

へと封じ目切り、突きつけられて、目にたまる涙を払い、伝兵衛「なに書置のこと。与次郎「や何じや、書置、

母親「これこれ兄、正直な、びつくりする事はない。そなたは無筆私しや盲目、書置じやと読み違え、うろたえさして門へ出て、娘を存分にしようとの巧み、ああそんな嘘はいませぬ、さあさあ本間に読まっしやれ、これこれ与次郎、表の娘に氣をつけて、門の戸を開きよんなや。

与次郎「おのおみこんでいる。ここにはおれがへばりついている。さあ早う読め、物こそはよう書かね、聞く事は無筆じやないわい、さあ早く読んだ読んだ。伝兵衛「まことにこれまでの御養育、海山にもたとえ難き親の御恩、こ

とさら不自由なる御身の上、何とぞ首尾よう勤めをのがれ、世を楽に過ぎませし候はば、せめて少しの御恩報じ、孝行の片端にもなり候わんと、それのみ朝夕折り参らせ候ところ、二世までもといい交し候伝兵衛様、思わぬこの度の御身の難も、根を

へふけゆく鐘も哀れ添う、頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇、過ぎし別れのいい交し、死なば一緒と伝兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、たたくむ軒は目覚めの、たしかにここと門の戸へ、さわる合図の咳払い。へきにお俊はとび立つ思い、上げる枕もうちはずす、へ与次郎はそばに高いびき、心もともに行燈の、燈火吹っ消し差し足に、心せく程あけかねる、戸口のかけ金表にも、

伝兵衛「お俊じやないか。お俊「伝兵衛さん、よう逢いに来て下さんした。へという声寂耳に与次郎が、びつくり起きるとあける門の口、妹が姿もくらまされ、捕える袖の振り合わせ、お俊と心得伝兵衛を、無理に引つ込みとり違え、戸口を内からびつしやり引き立て、

与次郎「そりやこそ来たぞ、お俊必ず外へ出まいぞや、戸口はおれが押さえている、門にいるは、アテ伝兵衛じや、おれを入れよう、

へいもうがたがた胸ぶるい。お俊「これいなあ兄さん、私や表にいるわいな。与次郎「何じや表にいるわいな、ええその声色おいてくれ。そんな事くうおれじやないわい。母者人々々々、伝兵衛がお俊を殺しに来た故、今表へ立て出した。おれ一人では手がまわらぬ、こなたも加勢して下されや、

へ加勢加勢とろうろう、うろたえ騒げば、母親も、母親「何じや伝兵衛の加勢、むむまだ他に同類でもあるのか、へと、さぐり寄つたる伝兵衛がそば。母親「コレコレお俊、ふるう事は無い、兄や母がついている、ま氣を鎮みや。

へとなでさすり、背中の手ざわり合点行かず、母親「これこれ与次郎、どうやらこれは娘ではないような。与次郎「アア暗がりまきれに材木が紛れやせぬか、こなたつかまえて下されや、

へとさぐる手先に火打箱、ガチガチふるう附木の光、与次郎「こりや妹じやない、アテ伝兵衛じや。伝兵衛「おふくろ、兄御、エエ面目もない。へこの姿と、なおも小隅にかがみいる。

尋ねれば皆われ故に候えば、今更見捨て候ては、女の道立ち申さず候、不孝とは思ひながら、ともに覚悟を極め参らせ候。

与次郎「母者人、どうやら風が変つてきたような。母親「さいのう、私も胸がどきどき、うう、さあたと読んで下さる。伝兵衛「ええ先ほど伝兵衛様へ退状と申してしたためしは、この事申し上げたきまま、退状といつわり、書き残し参らせ候、何事も何事も前世よりの定まり事とお諦め下され候、申し上げたき数々は、筆にも尽し難く候えども、心せくまま申し入り参らせ候。

へさてはそうした心かと、へおどろく伝兵衛、へ親子はうろろう、母親「ええええ氣遣いな、これ兄や娘を内へ、早うはよう、へと母があれれば、へ与次郎も、戸口を開ければ走り行く、妹を無理に四人が、顔見合せてため息の、涙はさらにわかちなく、へ何と言葉も伝兵衛が、泣く目をぬぐい、

伝兵衛「いったんいい交した言葉を立て、ともに死のうと覚悟して、義理をたてぬくそなたの貞節、忘れはせぬ、嬉しいぞや、へ思いまわせば廻すほど、我こそ死なでかなわぬ身。伝兵衛「そなたは科のない身の上、ともに死んではお二人の嘆き、命ながらえ亡きあとの、弔いとむらいを頼むぞと、

へいにお俊はとりすがり。お俊「そりやきこえませぬ伝兵衛様、へお言葉無理とは思わねど、そも逢いかかるはじめより、末の末までいい交し、互いに胸を明かしあい、何の遠慮も内証の、世話しられても恩に着ぬ、ほんの夫婦と思ふもの、大事の夫の難儀、命のきわにふり捨てて、女の道が立つものか、不孝とも悪人とも、思いあきららうこし、一緒に死なして下さんせと、隠せし剃刀と直す。

与次郎「ままた待て待ちおれやい、これで死ぬると命がないぞよ、(中略)ああ伝兵衛様の嘆かっしやるも道理じや、またお俊の泣きやるも道理じや、母者人の泣かじやるもなお道理じや、道理じや道理じや、道理じや、といては、根から葉からいつまでもわからぬ道理じやが、これ、二人ながら母者人の今の言葉、合点が参りましたか合点が行ったか、ええこりやわれも得心してくれたか、合点が行ったか、ささ合点したらば、どうぞこの場を立ち退く分別、ううしかしその形では人目に立つ、京の町を離

れるまで、この編笠に顔かくし、幸いの猿廻し、まめで二人が
末長う、めでとう夫婦になりとける門出の祝いに、この与次郎
が、お初徳兵衛が祝言の寿、こなた衆も生別れの盃、ああいや
いや祝言の盃と、

「祝い唄も声低に、お猿はめでたやめでたやな、髻入り姿ものつし
りと、これ、さりとほさりとほ、あろかいな、またあろかいな、
与次郎へお初徳兵衛さんごんせ、あまりこなさんが来ようがおそいに
よって、お初さんが顔まつかにして、腹立てていさんすわいの
う、これお初さん、髻さんが盃をせよといのう、機嫌を直して
盃をいだだかんせ、これわるさをせずとほんまにいたただかんせ、
おそでお初さんがいただく、のう、盃を、ままあろかいな、
与次郎へこれ髻さん、あまりつれのうさんすによって、お俊、いや嫁御
さんが起きさんせぬわいのう、そこらでちよつと起したり、
へこりややい、さりとほ、あろかいな、またあろかいな、起きたら互
いに抱きつきやれ、おおそれで機嫌が直つたぞ、これ、立たしやませ
ついでに日和を見てたもれ、好い女房じやに、よい女房じや、のう
あろかいな、またあろかいな、日和を見たらば落ちてたもれ、
与次郎へそうじや、お猿はめでたやめでたやな、
へきり、この家を猿廻し、まさるめでたやめでたやも、命まっとうし
てたもれ、日は見えねども見送る母、言葉もこの世できき納め、心の
内の暇乞い、あすの噂となりふりも、やつす姿の夫婦連れ、名を絵草紙
に聖護院、森をあてどにたどり行く。

六、三曲雨夜の月

初世中能島松声の代表作の一つ。
藤原俊基卿は承中の妾の主謀者であったが、いったんは証
提不十分で釈放されていた。それが他の者の自白により、ふ
たたび捕えられて、関東へ送られることになった。その道中
を叙した「太平記」巻二「俊基朝臣関東下向事」から抄出し
た歌詞。

「勸進帳」が、歌舞伎として知られていること、また
音楽としても、多くの他流の特色をとり入れながらもすつか
り長唄化され、演奏しやすいことも原因としてあげられよう。
いずれにしても、長唄の美点を集大成したといってもいいほ
どの名曲で、よく演奏される。
作者は三世並木瓶、作曲は四世杵屋六三郎（のちの六翁）
が、一世一代としてその技倆をふるったもので、作曲に三ヶ月
を費したと伝えられている。それも、はじめは全曲二上り
調の説教節じみた節付だったので、のちに改作して、現今の
本調子となったと伝えられている。
なお、初演のときの「勸進帳」は、いわゆる松羽目物の先
駆作品であり、また、演奏にあたっては立分れの形式をはじ
めたことも、特色として知られている。

「旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしおるらん。へ時しも
頃は如月の、きさらぎの十日の夜、へ月の都を立ち出でて、へこれやこ
の、行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山かくす、霞ぞ春
はゆかしける。波路はるかに行く舟の、海津の浦に着きにけり。へいざ
通らんと旅衣、関のこなたに立ちかかる。へそれ山伏といはば、役の優
婆塞の行儀をうけ、即身即仏の本体を、ここにうちとめ給わんこと、
明王の照覧計り難う、熊野権現の御罰当らんこと、立どころにおいて疑
いあるべからず、俺阿毘羅咩欠と、珠数さらさらとおし揉んだり。へも
とより勸進帳のあらはこそ、笈の内より往來の、巻物一卷取り出だし、
勸進帳と名付けつつ、高らかにこそ読み上げけれ。へ士卒がはこぶ広台
に、白綾袴一重、加賀絹あまた取り揃え、御前へこそは直しけれ。へこ
は嬉しやと山伏も、しすし立って歩まれけり。へすわや我が君あやし
むるは、一期の浮沈こなりと、おのおの後へ立ちかかる。へ金剛杖を
おっ取って、さんさんに打擲す。へ通れとこそはのしりぬ。へかたが
たは何故に、かほど賤しき強力に、太刀かたなを抜き給うは、目垂れ顔
のふるまい、臆病のいたりかと、みな山伏は、打刀抜きかけて、勇みか
かれるありさまは、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えにける。
へ士卒を引き連れ関守は、門の内へぞ入りける。へついに泣かぬ弁
慶も、一期の涙ぞ殊勝なる。へ判官御手を取り給い、へ鑑に添いし袖枕、

「元暦元年の……」は池田の宿で、『平家物語』にある重衡
中将東下りとくらべる主人公の悲しみ。そのあと鎌倉に至る
までの道中は、悲しさを通りこした放心状態で、道程を重ね
るにしたがって、主人公の不安感、絶望感が次第に強くなっ
て行くありさまが、十分にあらわされている。
山田流箏曲の中で、淨瑠璃物を除けば、多分もつとも長い
歌詞であるが、その長さは感じさせない構成となっている。
今日は、時間の都合で一部を省略して演奏する。

「落花の雪に踏み迷う、交野の春の桜狩、紅葉の錦着て帰る、嵐の山の
秋の暮、（中略）合へ忍びかねつ越え行けば、鏡の山はありとも、
涙に曇りて見えわかず、物を思えば夜の間に、老蘇の森の木がくれに、
都の空や隔つらん。（中略）合へ元暦元年の頃かとも、重衡の中将が、
東夷のために捕われて、ここに宿りを求めしに、東路の埴生の小屋のい
ふせきに、故郷いかに恋しがるらんと、長者の娘が詠みたりし、そのい
にしへの哀れまで、思い残さぬ涙なり。へ旅館の燈火かすかにして、鶏
鳴曉を催せば、匹馬風にななきて、天龍川をうち渡り、小夜の中山過
ぎ行けば、いとど哀れを菊川や、涙の流れ汲みかねて、やがてぞ越ゆる
大井川、（中略）合へ向うはいづこ三保ヶ崎、興津浦原うち越えて、畜
士の高根に立つ煙、合へ上なき思いにくらべつつ、明るる霞に松見えて、
浮島ヶ原を過ぎ行けば、（中略）合へ竹の下道行き悩む、足柄山をこゆ
るぎの、急ぐとしもはなけれど、日数つもればその日に、鎌倉にこ
そ着きにけれ。

七、長唄勸進帳

この曲は「越後獅子」などとともに、長唄の代表曲として
よく知られている。元來、舞踊劇の地（伴奏）として作られ
たので、歌詞だけをきいていたのでは、意の通じないところ
がある。それにもかかわらずもてはやされているのは、劇と

かたしく隙も波の上、あるときは舟に浮かび、風波に身をまかせ、また
ある時は山背の、馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しあり夕浪の、立ち来る
音や須磨磨石、とかく三年の程もなく痛わしやと、しおれかかりし
鬼あざみ、霜に露置くばかりなり。へ互いに袖を引き連れて、いざさせ
給えの折柄に、へげにげにこれも心得たり、人の情の盃を、受けて心を
とどむとかや。へ今は昔の語り草、へあら恥かしの我が心、一度まみえ
し女さえ、へ迷いの道の関越えて、今またここに越えかぬる。へ人目の
関のやるせなや、へああ悟られぬこそ浮世なれ。へ面白や山水に、おも
しろや山水に、盃を浮かべては、流に引かるる曲水の、手まずささぎる
袖ふれて、いざや舞を舞おうよ。へもとより弁慶は三塔の遊僧、舞延年
の時の和歌。へこれなる山水の、落ちて巖にひびくこそ、鳴るは滝の水、
鳴るは滝の水。へ鳴るは滝の水、日は照るとも、絶えずとうたり、とく
とく立てや手束弓の、心許すな関守の人々、暇申してさらばよとて、笈
をおつとり肩にうちかけ、へ虎の尾を踏み毒蛇の口を、のがれたる心地
して、陸奥の国へぞ下りける。

一、河東 助六由縁江戸桜(助六)

すけろくゆかりのえとぎくら

河東節は、今から凡そ二百六十年以前に江戸で生れ、その後今日まで江戸っ子が愛好して育てて来た浄瑠璃で、別に江戸節ともいわれている。

今日演奏される助六は、その江戸節の中でも、とくに代表作といわれる作品で、歌舞伎十八番の「助六」の芝居で、助六が登場してくる場面で使われる。歌舞伎の「助六」ではじめてこの河東節が使われたのは、宝暦十一年(一七六一)のことで、天保三年(一八三二)に歌舞伎十八番の内と銘うたれてからは、市川家の助六に限って、この河東節がうたわれることになった。

助六実はず我五郎が、友切丸詮義のために廓に入り、意休を切つて刀を取り戻すという簡単なストーリーだが、豪華けらんたる舞台装置とあてやかな衣裳のとり合せ、そして江戸っ子の代表助六の大活躍で、観客を魅了してきた。

その助六が舞台に登場してくるとき、伴奏として正面の御簾内で語られる浄瑠璃がこの「助六」で、華やかな気分を盛り上げる大切な浄瑠璃となっている。

本調子(春霞立てるやいずこ三好野の、山口三浦うらうらと、うら若草や初花に、和らぐ土手を誰がいうて、日本めでたき国の名の、豊原や吉原に、根ごして植えし江戸桜、匂う夕べの風につれ、鐘は上野か浅草か、その名を伝う花川戸。へ遠近人の呼子鳥、いなにはあらぬ逢う瀬より、ここを浮世の仲の町、よしや交せし越し方を、へ思い出見世や消接の、音じめの撥に招かれて、それといわねど顔よ鳥、間夫の名取の草の

へ恋と忠義はいずれが重い、かけて思いは、はかりなや。忠と信の武士に、君が情と預けられ、静に忍ぶ都をば、あとに見捨てて旅立ちて 作らぬ姿も義経の、御行末は難波津の、波にゆられてただよいて、今は芳野と人づての、噂を道の栗にて、大和路さして慕い行く。(中略)へ見渡せば、四方の梢もほころびて、梅が枝うたう歌姫の、里の男が声々にへわがつまが、天井ぬけて据える膳、昼の枕はつがもなや、天井ぬけてすえる膳、昼の枕はつがもなや、おおつがもなや、へおかし鳥の一節に、人もわら家の育ちにも、春は羽子つく、手鞠一イニウつくつくと聞けば、東風風音添えて、去年の氷を徳若に、御萬歳と君も栄えまします。ありきようありや頼もしや。さぞや大和の人ならば、御隠れ家をいざ問わん。われも初音のこの鼓、君の栄を寿きて、昔を今になすよしもがな。へ谷の鶯初音の鼓、調べあやなす音につれて、つれてまねぐさ、おくれればせなる忠信が旅姿、背に風呂敷をしかとせたら負うて、野道畔道ゆらりゆらり、軽いとりにいそいそと、目立たぬように道へだて、女中の足と侮つて、さぞお待ちかね、ここ幸いの人目なしと、姓名添えて給わりし、御着長を取り出だし、君と敬い奉る。静は鼓を御顔と、よそえて上に沖の石、人こそ知らね西国へ、御下向の御海上、波風あらく御船を、住吉浦へ吹き上げられ、それより芳野にましますよし、やがてぞ参り候わんと、互いの形見を取り納め。へ雁とつばめはどちらが可愛い、赤子を育つる燕が可愛い、花を見捨つる雁金ならば、文の便りまたの縁、ええそうじやいな、ええそうじやいな、歌う声々面白や。へげにこの鎧を給わりしも、兄継信が忠勤なり。八島の戦いわが君の、御馬の矢おもてに、駒をかけるえ立ちふさがる。おおききおよぶその時に、平家の方に名高き強弓、能登守教経と、名乗りもあえずよびいて、放つ矢先はうらめしや、兄継信が胸板に、たまりもあえずまっさかさま、あえなき最後は忠臣義士の名を残す、思い出するも涙にて、袖はかわかぬ筒井筒いつか御身のびやかに、春の柳生の糸長く、枝を連ぬる御契り、などかはくちしかるべきと、互いにいさめいさめられ、急ぐとすれどはかどらぬ、声原峠の里、土田六田も遠からぬ、野路の春風吹き払い、雲と見紛う三芳野の、ふもとの里にぞ着きにける。

花。へ思い染めたる五つ所、へ紋日待つ日のよすがさえ、子供が便り待合の、辻占茶屋に濡れてぬる、雨の簑輪の冴え返る。へこの鉢巻は過ぎし頃、ゆかりの筋の紫も、君が許しの色見えて、移り変らで常盤木の、松の刷毛先すき額。へ堤八町風誘う、目あての柳花の雪、傘に積りし山あいは、富士と筑波をかざし草、草に音せぬ塗り鼻緒。へ一つ印籠一つ前。三下りへせくなせきやるなサヨエ、浮世はナ車サヨエ 本調子へ廻る日なみの約束に、離へ立ちておとづれも、果ては口舌かありふれた、手管に落ちて睦言と、なりふり床し君ゆかし。へしんぞ、へ命を揚巻の、これ助六が前渡り、風情なりける次第なり。

二、義太夫道行初音旅(吉野山)

義経千本桜

みちゆきはつねのたび

竹田出雲・三好松洛・並木千柳合作。延享四年(一七四七)十一月、大阪竹本座初演。義経伝説を題材にしているが、むろ壇ノ浦で没落した平家の後日物語といえよう。

この作品は、この前年に初演された「菅原伝授手習鑑」、翌年に初演された「仮名手本忠臣蔵」とともに、日本演劇の三大傑作に数えられる名作である。

「道行初音旅」は、その四段目にあたる場面面で、静御前が忠信を供に連れ、吉野にいくという義経をたずねての道行。忠信は八島の戦いで兄継信の壮烈な最後のさまを物語る。ところでこの忠信は、二段目の伏線からこのあとの川連館で説明されるように狐の化身で、静の持っている初音の鼓の皮になった老狐の子であることを忘れてはならない。

なお、初演のときこの場の忠信の衣裳に、演出者の吉田文三郎が、この場を語る政太夫の定紋源氏車の模様をつけたところ、大好評で、以後、忠信とあれば源氏車の模様に限られることになった。

なお、第一部の清元「吉野山道行」を参照されたい。

三、三曲五段 だん ぎぬた

天保(一八三〇〜四三)のころ、光崎検校の作曲。当時全盛をきわめていた地唄の行事ものに対して、箏本来の昔に帰ろうとする復古運動を提唱して、不巧の名作「秋風の曲」とともに世に問うたものである。

竹生高の弁財天に参籠して曲を練り、仕上げるまでに五年もかかったということである。

高音雲井調子、低音平調子の二部合奏であるが、従来の本手に対する替手といったような作り方ではなく、両方同じウエイトで作られていて、その合奏は箏合奏の極致といわれている。

四、清元 道行故郷の春雨(梅川)

みちゆきこきょう

はるさめ

文政七年(一八二四)三月江戸市村座初演、内容は、義太夫節「けいせい恋飛脚」新口村の段の詞章を、そのまま借りてある。江戸の人にわかりやすくするために清元にしたもので、初世清元齋兵衛の作曲。

大和国新口村の百姓孫右衛門の一人息子忠兵衛は、ゆえあって大阪の飛脚問屋亀屋の養子となっている。ふとしたことから榎屋の梅川と馴染みになり、金につまったあげく、友人の八右衛門に渡すべき為替金五十両を使いこんでしまう。八右衛門はそれを許したが、廓へ来て、忠兵衛を寄せつけぬようにしてもらいたいと話す。それをきいた忠兵衛は、だまたま預かっていた屋敷へ届けるための三百両の封印を切り、五十両を八右衛門にたたきつけ、残りの二百五十両を、養子にきたときの持参金といつわり、梅川を身請けし、手に手をとって大和路さして落ちて行く。

それから二十日ばかりのち、故郷の新口村へたどりついた梅川と忠兵衛が、忠兵衛の父の父孫右衛門に對面するといふ場面。二人のせつない氣持が十分にあらわれた名曲で、よく演奏される。

二十日あまりに四十兩、使い果して二分残る」とか、京の六条殊数屋町」などは、一種の流行語として知られていた。

へ落人の、ためかや今は若草の、すすき尾花はなけれど、世を忍ぶ身のあとや先、へ人目を包む頼かむり、へかくせと色香梅川が、なれぬ旅路を忠兵衛が、あたためられつあためつ、へ石原道をはかどらぬ、へ身の繰り言は愚痴なれど、大恩うけし養子親、御苦労かけしその上に、あすの嘆きの数々は、とくととかれぬ三度荷の、重き不孝の罪科と、かこち涙に目もうるむ。へ顔つれづれとうちまもり、それするようにいわず程、この梅川が身のつらさ、へ惚れた女子のしようがには、仇なつとめを実にして、末は女夫といひ交わし、今のお前の憂き難儀、堪忍してとばかりにて、あとは涙の村時雨、へのべのみづおりしおるにも、へ急げば早き故郷の、新口村にぞ着きにけり。

忠兵衛へこれこそ私が生れ在所、四五丁行けば実の親孫右衛門様の所なれど、今の身の上をお目にかけるとは大きな不孝、この襲草は忠三郎というて、親達の家来同然、しばし身の上を頼んで見ん。梅川へそんならここがお前の在所新口村でござんすかえ。人目いどうて来たなれど、ほんに思はは、

へ大阪を立ち退いても、私が姿目に立てば、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日と夜を明かし、二十日あまりに四十兩、使い果たして二分残る、金ゆえ大事な忠兵衛さん、科人にしたも私から、さぞ憎からうお腹も立とが、因果づくじやとあきらめて、お許しなされて下さりませ。

梅川へよしない私ゆえ、お前に心づかいさせますと、思ははひよつと愛想も尽きようかと、そればかりが悲しゆうござんす、そうしてここは剣の中、こうしていても大事ござんせぬかえ。忠兵衛へいやいや男氣な忠三郎、頼んで今宵はここに泊り、死ぬるとも故郷の土、

へ生みの母の墓所へ、一緒に埋もれ嫁姑の未来の對面させたいと、目も

の家七重桐が、坂田時行の魂を胎内に宿し、信州上路の山中に住み、時行の子怪童丸を生み山姥になつてゐる、という風に改作した。

これが發展して多く頼光四天王の世界の顔見世狂言にとり入れられ、歌舞伎の所作事に多くの作品を生み、重要な系統となつた。それらの曲は、山姥の山めぐりと、怪童丸（のち金時）の荒事を中心であつた。

これらの多くの作品を集大成したのがこの「新山姥」で、それまでの各流の長所をとつてあり、とくに山めぐりのあたりは力を入れて作曲している。常磐津のエッセンスともいふべき名作で、舞踊にもとりあげられる事が多く、流行している。

嘉永元年（一八四八）十一月、江戸河原崎座初演。三升屋二三治作詞、四世岸沢式佐作曲。

へ四面峨々たる足柄山、へ麓に通う雄が本、巖に染める鶯かづら、君命受けてますらおが、へ曲げたる脇の高枕、げに一瓢の樂しみの、眠りをさます山嵐。へ山高うして雲行客の跡を埋む。君命うけてこの日頃、かく山賊と様を変え、深山幽谷さらいなく、行きなり次第の氣まま酒、眠けざましに、どりや一杯やるべいか。へ酒はかりなき盃に、注げば映ろう星の影。

よき藏へああら怪しやな。客星ここにたんだくなし、我が盃中に影さすは、さては一定人傑の、この山中にあるという、天の知らせか何にもせよ、奇異なることを見るものじやな。ははあこれで讀めた、心あたりは山住みの、女が連れるいつもの小僧、どりや一服のんで待つべいか。

へ錦の袂引きかえて、木の葉衣を露霜に、染めてあげろの山姥と、人や岩間の苔清水、心細道たどたとと、杖を力に歩みくる。

よき藏へおやおおふくろ、今日はまだ逢いませぬの。山姥へおお山賊のよき藏殿、また焚火のご馳走しましょうかいの。よき藏へそれはかたじけねえ。ときに小僧はどうしましたな。山姥へさればいの、あとの麓まで連れ立って来ましたが、おおかた猪猿を相手に、相撲がなとつていましてうわいな。

うろろと泣きければ、へそれは嬉しゆうござんしよう、さりながら、私がほんの母さんは、京の六条殊数屋町、一目逢うて死にたいと、またも涙にむせびいる。

忠兵衛へお道理じや道理じや、恩のある養子親妙閑様や、許嫁のおすわへも不埒のわび、お、あれあれ、あれへお見えなさるは親父様、この世のお別れよそながらのお暇乞い。

梅川へそんならあの緞子の肩衣を着てござんすが、お前の父さんでござんすかえ。ほんに親子とて争われぬもの、目元なら口元なら、お前によく似た事わいな。

忠兵衛へさそのようによう似た親と子が、言葉さえ交されぬは、何としたこの身の因果、

梅川へほんに今がお顔の見はじめの見納め、もし、私や嫁の梅川でござんすわいな。

へあなたへ御苦労かけますも、みんなわしゆえ、この梅川ゆえ。

忠兵衛へあれ、人目にかからば互いの身の上、少しも早う、

梅川へそれじやというて、これがこの世の、忠兵衛へええ、未練なこと。

へ平沙のうたう血の涙、永き親子の別れには、安方ならで安からぬ、心残して別れゆく。

両人へおさらば。へ心残して別れ行く。

五、常磐津 薪荷雪間の市川（新山姥）

たきぎおうゆきま いちかか

山姥というのは、山に住む怪物といった意味で、超自然的な存在として考えられていた。これが劇化された最初は能楽の「山姥」で、遊女あがりの女芸人で山姥の山めぐりの曲舞を得意とする百万山姥が、善光寺参りの途中、信州上路の山中で本物の山姥に逢い、山めぐりの舞を見ると筋になつた。それを、近松門左衛門は「嬬山姥」で、遊女あがりの女芸

よき藏へそれは危ない、早うここへ呼ばせ、呼ばせ。

山姥へほんにまあ、おとましい事ではあるぞいのう。

へああおとましいとかこち言、それと見つけて、

よき藏へあれあれ御覽じませ、あのような大きな石をもてあそんで、怪我でもしたらどうしようと思やるぞ、道草も程がある。こりや

怪童丸、怪童丸やあい。

怪童丸へおい。

へ神楽月とて片山里を、笛や太鼓で面白や。足の冷たいに草履買うてたもれ。子をとり子とろ、どの子が目づき、あの子が目づき、籠目かごめ、かこの中の鳥は、いついつ出やる、夜明のばんに、つるつるつぱいた、木の根笹原くぐりくぐって、ひよいと出たみどり子。

山姥へこれこれ怪童、早うおじやいの。

怪童丸へあい。

へ母を慕うて山道を、尋ね木咲の梅の花よき。

怪童丸へかか、おらこんな花折ってきたよ。

へ花うちしようと振りたてて、いたづら盛りの愛らしき。

よき藏へやれ小僧、よく帰って来たな。

山姥へおおよう戻つておじやつたのう。さあさあいつもの通り、小父様へおじじや、お辞儀じや。

よき藏へおお、お辞儀がよく出来ましたな。

怪童丸へかかさま、何ぞ下されや。

山姥へおとなしゆう遊んでおじやつたその褒美に、この間から、あつかの衣織つて着しようと思つてな、山路めぐらぬそのひまに、

五百機立つる窓の内、

へ枝の鶯、糸繰り綿繰り、織つて着せたる母のほんそ子、里へ下れば、

里の土産は、でんでん太鼓にふり鼓、へうつや空蟬のから衣、千声萬声の砧に合はず鼓の拍子、へ面白や。

怪童丸へさあこれからが馬事じや、馬事じや、

よき藏へどれどれ、おれがいいものを貸してやろう、このまさかりを馬にして。

山姥へ母が離してやりましょう。

へ月毛にあらぬ斧の駒、へとるや手綱のりりしげに、先のけさきのけ先のけろ。へお月様いくつ。へ十三七つ。へお供はいくつ。へ八十八つ。

へほんにそりや若いなあ。へ母の胎内蹴破つて、へ産所も産湯も山なれ

ば、取上げお婆に事をかき、産湯の代りに四方の赤、浴せられたかどつこもかも、まっかくなつて北蟻蛾の、踊りくどきは、何と云うた。

二上りへおらが在所はな、奥山のててうちの、でんぐりでんぐり、栗の木根を枕にござれ、抱いてころび寝。

怪童へかかさま、乳のもう。

山姥へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

山姥へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

三田仕へははあ、力の程は見た見えた、今よりしては頼光公の家臣となり、父が家名をそのままに、坂田の金時と名乗らせん。喜べ。

山姥へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

怪童へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

三田仕へははあ、力の程は見た見えた、今よりしては頼光公の家臣となり、父が家名をそのままに、坂田の金時と名乗らせん。喜べ。

る金時が、まっさきかける冬至梅、一陽ひらく智勇の花、歌舞伎の栄えぞめでたけれ。

六、長唄 其面影二人椀久(二人椀久)

そのおもかげににんわんきゅう

大阪界筋の豪商椀屋久右衛門が、新町の傾城松山と契り、豪遊の果て、座敷牢に入れられ、ついに発狂して死んだという事件があった。延宝五年(一六七七)とも、貞享元年(一六八四)ともいわれている。浄瑠璃や歌舞伎では椀屋久兵衛という名に変えて脚色され、狂乱ものとして知られている。

「二人椀久」は、その「椀久もの」の一つである。二人椀久」というのは、二人の椀久が出てくるのではなく、狂乱した椀久のあとを追ってきた松山が、椀久の羽織を着て、あるときは自分、またあるときには椀久になるという男女を振りわける踊りがついているので、この名前がつけられたのである。

長唄では、享保十九年(一七三四)江戸市村座で初演したものも古く、安永三年(一七七四)同座でその追善の意味をふくめて再演したのが、この「其面影二人椀久」である。したがって、歌詞も前者に置唄がふえていただけ、ほとんど変りがない。

作曲も、前者をほとんど踏襲していると考えられるが、ともかく現在の形にしたのは、錦屋金蔵である。曲は長唄初期の名作の一つとして、現在も大流行しているが、江戸時代には、今のようには派手なものではなかった。それを根岸の勘五郎(三世杵屋勘五郎)が、踊り地のタマ(手事)を面白く工夫し、その即興的技法が明治初期の長唄界の評判となり、その表現方法がその後各流各派にとり入れられ、現在の形に完成されたのである。

三田仕へははあ、力の程は見た見えた、今よりしては頼光公の家臣となり、父が家名をそのままに、坂田の金時と名乗らせん。喜べ。

怪童へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

山姥へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

三田仕へははあ、力の程は見た見えた、今よりしては頼光公の家臣となり、父が家名をそのままに、坂田の金時と名乗らせん。喜べ。

山姥へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

怪童へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

三田仕へははあ、力の程は見た見えた、今よりしては頼光公の家臣となり、父が家名をそのままに、坂田の金時と名乗らせん。喜べ。

山姥へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

怪童へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじゃが、嬉しいかや。

三田仕へははあ、力の程は見た見えた、今よりしては頼光公の家臣となり、父が家名をそのままに、坂田の金時と名乗らせん。喜べ。

くら、悪じやれの、花も実もあるしこなしは、一重二重や三重の帯、ふすまの中ぞ候かしく。

七、三曲岡 康 砧

この曲は、山田曲としては一風変わったもので、多分に手事風のところが有り、歌ものといっても、詩情ゆたかな秋の夜の砧の拍子をとって器楽性の勝っている曲である。もとこの曲は、江戸時代からあった胡弓の藤植流に「砧の曲」としてあったもので、胡弓の家元山室保嘉と三世山勢松韻が明治三十年頃、箏曲に移して世に出したといわれている。原曲は岡安小三郎作曲となっているが、岡安が岡康となつたのは、徳川家康が駿府滞在中にこれをきいて感動し、自分の康の字に変えよといったので、それから岡康になったといふ伝説が伝わっている。真偽は不明だが、ともかく山田曲としては異例の手事風のものとして、その華麗な旋律が好まれ、三曲合奏としての流行曲となっている。

（手事）へ月の前の砧は、へ夜寒を告ぐる、雲井の雁は、琴柱にうつして面白や。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。この会も回を重ねまして、ごらんの通り六回目の演奏会を開催することができました。御協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。このようにして、邦楽の各流派が自主的に集まって演奏会を開くということは、今までにあまり例がありませんでした。これからも、この会は続けて行きたいと思っておりますし、またこの催しを土台にして、邦楽について考えたり、話し合ったりして、よりよい明日の邦楽のために努力して参りたいと思っておりますので、今日おきき下さいました御意見や御感想などを、どうぞお寄せ下さいますようお願い申し上げます。何かと不行届の点もありませんようが、お許しを願ひまして、どうぞ御ゆつくりとお楽しみ下さいますよう、御願ひ申し上げます。